

論文の内容の要旨

論文題目 多様性の創出ーディドロにおける自然・美・政治ー

氏 名 井柳 美紀

本稿の目的は、18世紀フランスの思想家ドゥニ・ディドロの思想を、多様性の観念の創出と、その多様性を前提とした政治のあり方という観点から読み解いてゆくことにある。これは、ヨーロッパ近代に圧倒的な影響力をもった普遍的かつ合理的な知のあり方に対する同時代からの批判の一つの足跡に光を当てようとするものであり、またヨーロッパ思想史における多様性の観念の成立史に何らかの寄与を試みようとするものでもある。

ヨーロッパ思想史において、普遍主義を標榜する歴史はプラトン以来の根強い伝統であるが、18世紀は近代合理主義の影響下でその基盤をさらに堅固なものとした。啓蒙の時代の知識人に相応しくディドロは普遍主義を強く主張したが、他方で、普遍主義との関わりで多様性というものの価値を次第に見いだしてゆく。バーリンやラブジョイらが言うように、多様性という観念を一つの価値として発見したのは、19世紀のロマン主義者たちであるが、以下でみるように、ディドロの思想にはロマン主義には解消されえない彼固有の多様性への視座があったと考えられる。

本稿では、ディドロが多様性の観念を創出する過程を、第1章「自然と多様性」、第2章「美と多様性」、第3章「政治と多様性」という3つの視角から論じてゆく。

第1章では「自然と多様性」を論ずる。彼は最初の作品で、彼が生涯支持しつづける自然観を示す。すなわち、自然は、諸部分が相互に連結した一つの大きな全体とされる。また彼にとって自然

と社会は連続的に把握されるため、これは社会観にも適用される。この議論は、当初、理神論の下で論じられ、個と全体の調和的世界観とも結びついてきたが、ここでは全体の調和は神の意図によるものとされるため、個人は予め秩序の中に組み込まれた存在となる。次に、彼は、神に基礎づけられた形而上学的世界への反発から、人間中心主義を標榜する感覚論へと移行するが、次第にそれが真理の在処を危うくするものだとして唯物論へと向かう。しかし、唯物論においては、人間が外的環境の関数にすぎず、人間はただあるべき秩序へ向けて陶冶されるべき存在となり、ここに人間の自由や多様性の余地はない。

彼は、理神論を信じた時代に、デカルトやニュートンらの機械論的自然観を支持していた。それは自然が幾何学的な法則に依拠するものであり、その結果、人間は自然を客観的かつ合理的に把握可能なものとするようになる。しかし、デイドロは、当時、新興の学問領域であった生物学・化学・医学・生理学などに関心を払い、物体に内在する生命を認め、自然が法則的ではなく、神の助力なしに絶えず変化するとの認識にいたる。つまり、彼にとって、世界とは絶えず変化を繰り返すものであるから、同一なものは何もなく、ここに自然と人間の多様性が看取される。彼の新しい自然観は19世紀の進化論の端緒となるが、種の優劣を想定するような進化論とは異なり、個々の多様性を相対的に捉える視座をもっていた。なぜなら、彼にとって、自然は連続的であり、またその自然を分類化する思考自体が拒否されるからである。

他方で、「有為転変」を繰り返す自然の中で、人間もまた一時たりとも同じではないが、人間は「記憶」により「自己の生活の歴史」をつくり「自我の意識」を形成しうるという。それにより、彼はかつての環境決定論から決別する。つまり、人間は自然の一部でありつつも、自然の中に新しい何かを「創造する」ことが出来るからである。これは、人間が自然の多様化原理に加わることでもある。さらに、それは「自然」（＝「規範」）に捕われない、その人固有の作品を生む人という意味での人間の「個性」（＝この語は18世紀の新語である）の発見へと繋がる。他方で、彼は、差異ある人々がいかに他者との関係性を構築しうるかを考え、想像力（＝全体のイメージを喚起する能力）による他者への共感にも目を向けた。

第2章では「美と多様性」を論ずる。＜美とは自然を模倣することである＞とのアリストテレスの見方は、ルネサンス以降、美の規範と見なされてきた。なぜなら、真善美は三位一体だからであり、それゆえ芸術家とは人々に「真理」や「道徳」を伝える使命をもつ人となる。ここで、芸術家は「真理」の「謙虚な弟子」である。デイドロ自身も、当初、「美」の一般理論の中でも、あるいは演劇論、小説論、絵画論の中でも、芸術が＜模倣としての美＞、＜教訓としての美＞のためにあり、そして「模倣」すべき対象がアプリアリな「真理」であることを一貫して述べている。また、彼がその「真理」を発見するのが「悟性」であると述べたことは「真理」が合理的な基礎をもつものだということを意味してもいる。

しかし、彼は、その後、合理主義の限界を自覚し、人間の非合理的な能力に注目する。例えば、彼は、言語の限界性への自覚から、芸術の役割を認識し、「想像力」などの能力に注目する。また、彼の新しい自然観は、彼に「真理を発見する」ことの困難性を自覚させ、創造美の世界を切り開く。

つまり、彼は、芸術活動を人間が「自然」の中に「美の理想的モデル」を探求することのうちに思いだして行く。しかし、これはプラトンのようにアイデアの世界を目指すものではなく、人間が自然の多様化原理に創造活動を通して加わることを意味した。こうして芸術家は、自然の「弟子」ではなく「自らの太陽をもつ人」となる。他方で、彼は創造する能力が、単に芸術家の特権ではなく、絵をみる鑑賞者の悦楽でもあるという見地に「廢墟画」の批評を通して辿り着く。

こうして、彼は人間が「美」を「創造する」と述べることで、ロマン主義の祖の一人となる。しかし、彼は晩年、再度、自らの「理性」と「情念」の関係を逆転させ、人間は自らのうちに「冷静なる観察者」の視座が必要だということ、つまり人間の理性の大切さを説く。これは、なお彼において芸術は自然を離れてはありえず一定の限度の中にあるのであり、芸術においても無制約に何ものかを創造しうるのではないということの意味しよう。彼は、芸術においても、あくまで全体の連関性という大きな目的を視野に入れていたのである。しかし、いまや、「理想的モデル」は、ア・プリオリな真理ではない、個々の人々が作り上げていく**作為の結果**としての真理となる。

第3章は「政治と多様性」を論ずる。当初、ディドロは、時と場所とを越えて普遍的に妥当する「正義」の観念を前提として、そのような「正義」を実現するための政治としての、いわゆる啓蒙専制政治を支持していた。ここでは、「正義」や「真理」は唯一絶対的なものであるから、それを実現する権力が正しく善良であるならば、権力は絶対的であるべきとされ、中間権力や抵抗権も否定される。そのような彼の主張は、「合法的専制君主」を支持するフィジオクラットへの共感のうちに示される。

けれども、彼は、以降、様々な政治的経験を経て、初期の啓蒙専制政治観から離別する。例えば、彼は、小麦論争や飢饉に直面して、抽象的原理の現実状況への適用に対する反省を迫られ、「真理」と「政治」の関連性を見直す。あるいは、ロシアを訪れ啓蒙専制君主エカテリーナ二世と対話したことは、彼を啓蒙専制君主批判へと導く。すなわち、彼はたとえ善良な君主でも、「真理」による統治は、人々の自発性や判断力を奪い、かつ人々の「多様性」を捨象するという考えに行き着いた。それゆえ、彼はかつて否定した中間権力を認め、さらにはアメリカ革命を肯定するなど抵抗権にも踏み込む。けれども、彼は最晩年、革命を賞賛しない。結局、彼は秩序の破壊によるアナーキーを好まなかった。けれども、このとき彼は秩序のために多様性を切り捨てたわけではない。彼は、人間の生来的多様性や人間の独創性への賞賛から、抽象的個人ではない、個別具体的人間こそ政治の主体と考えるようになる。そこから彼は政治が、人々が「原理」ではない「行為」のなかから、相互の「**関係**」のあり方を発見し、かつ**作り上げていく**ことであると見なすようになってゆく。

そして、彼の晩年の「文明化」の構想の中には、多様性を前提とした政治観が見て取れる。彼は、人々の多様性を前提として、例えば、「文明化」の過程において「強制」や「秩序を課すこと」を拒否し、「下からの文明化」を主張する。あるいは「自由」や「財産」を人々の「個性」を育むための条件として尊重する。しかも、彼は、多様な人々が、共に暮らすための「紐帯」が必要だとも考える。人々はバラバラなだけであってはいけないからである。例えば、彼はその「紐帯」の原

理の一つを「商業」に見いだす。つまり、そこでは人々の「独立と交流」が前提とされるからである。そして、彼はそこから「多様性」を前提とした「普遍的な社会」が成立することを切望した。

こうして、ディドロは、彼の最初に示した自然観、つまり世界はバラバラではなく連結した一つの全体である、という自然観を、政治社会のうえにも適用した。しかし、それはかつてのようにアприオリな真理と結びつくものではなく、多様性と結びつくものとなった。ところで、彼の思想の独創性とは単に人々の多様性を前提とした一つの共同体を目指したことのうちにあるだけではない。実のところ、彼にとって、多様性とは、そもそも他者との関係の中からは生まれないと考えられているのである。彼は、自然観を論ずる中で、全体の中で連鎖する各々が相互に影響を与えあうことのうちに、多様性が生ずることの可能性をみていたのである。すなわち、多様化とは、他との関係があって、初めて他と異なるものが生まれるということなのである。つまり、彼にとっては多様性のためにも全体の関係性の構築が必要だということになる。